

# 情緒状態と「動き」の投影

—異なるテンポによる音刺激が動きの程度と速さに与える影響—

門 前 豊志子

これまで、動きの投影について、実験的にそのメカニズムを解明しようと試みてきた。個体の情緒状態を縦軸とし、外的刺激要因を横軸として、両者の関係を「動き」という観点から分析することによって、情緒状態と動きの投影との関係を把握し、そのメカニズムを明らかにしていこうとするものである。

「動き」の知覚や感覚は、個体の外界の刺激に対する認知の一つの様式であると考えられる。個体が外界の刺激に対してどのように「動き」を感じているかを知ることによって、個体の情緒状態とその情緒を反映した投影の仕方の図式が導きだされるであろう。「動き」の投影のされ方のちがいによって内的情緒状態のちがいが察知されるとする考えの根拠には、ロールシャッハ法からの臨床的な知見に基づいている（門前、1975、1976）。

門前は、ロールシャッハ法によるあいまい図形にとどまらず、あいまいでない図形刺激において、「動き」の投影と情緒状態との関係を検討すべく、実験を重ねてきた。内的情緒状態としては、快・不快を尺度として設定してきた。

これまでの実験で得られた主な結果を列挙してみると以下のような事柄が明らかとなった。

① 個体の情緒状態が快の状態のときの方が、不快な状態のときよりも、有意に高い「動き」の投影が促がされる。不快な状態のときには、「動き」が抑制されるか、もしくは促進されるかの両方向の「動き」の投影がなされる。

② 「動き」の投影を考えると、動きの量的側面と動きの質的側面とに分けて、二元的に捉える必要がある。「動き」の量的側面として、動きの程度（運

動量)が考えられ、「動き」の質的側面として、動きの速さと、方向性が考えられる。また、不快な情緒状態においては、動きの程度と速さは、相補的関係をとることが知られている。

③ 図形刺激特性に関しては、図形を構成している要因(形態や色彩)と図形の構造的特性(安定性・不安定性、具体性・抽象性)とに分けて考えることができる。

## 目 的

既に得られた知見をもとにして、今回は、異なるテンポの音刺激が動きの投影にどのような影響を与えるかを検討してみる。

音刺激(協和音と不協和音)が、個体の情緒を惹起させて、快・不快の情緒状態を形成するはたらきをもつことは、既に実証されている。したがって、遅いテンポの音刺激と、早いテンポの音刺激とでは、異なる情緒状態を形成させることが可能であると予測される。本実験では、異なるテンポにより惹起させられた情緒が、動きの程度と動きの速さに、どのような影響を与えるかを、実験的に検討してみることを目的とする。

## 仮 定

仮定1 早いテンポによる音刺激の下におかれた情緒状態の方が、遅いテンポによる音刺激の下におかれた情緒状態よりも、より活発な「動き」の投影を促しやすいであろう。

仮定2 図形の形態よりも、色彩(本来、黒色は無彩色とされるが、本実験では白色図形と区別するために、敢えて色彩という用語を使用してきた。今後とも同じ意味で用いることを断っておく)に「動き」の投影の相違が認められるであろう。

## 方 法

**被験者** 女子短大生 88名。年齢18—19歳。

**実験計画** 被験者を無作為に四群に分けて実験状況を設定した。実験計画表(表1)に示す通りである。

CO(40)群とは、音刺激が♩ = 40の速さのテンポで実験的に快状態におかれ、黒色と白色の図形の組合せからなる図形刺激の系列を提示され、動きの投影が測定される群である。

UC(40)群とは、音刺激のテンポは同じであるが、実験的に不快状態におかれ動きの投影が測定される群である。

CO(120)群とは、音刺激が♩ = 120の速さのテンポで、CO(40)群と同様の状況におかれる群であり、UC(120)群とは、同じく♩ = 120の速さのテンポで、UC(40)群と同じ実験状況におかれる群である。

**図形刺激** 15枚の幾何学図形からなり立っている(図1)。

**情緒状態** エレクトーン演奏による協和音、不協和音をそれぞれのテンポに応じて連続演奏し、録音したものを使用している。刺激音に対する快・不快の評定の信頼性と妥当性はすでに検証されている(門前, 1982)。

**手続き** 室内前方中央スクリーンにて、スライドで10秒間図形刺激を提示し、1回提示毎に、その直後5秒間、記録用紙に、動きの程度、動きの速さ、動きの方向性について記入させる。動きの程度は、動きが無いものを0とし、動きの有る場合は1から4までの4段階評定とした。動きの速さについては、動きが有ると評定した者のみ、その速さについて1から3まで(遅い、ふつう、早い)の3段階の評定をさせた。動きの方向性については、同じく動きが有ると評定した者のみ、矢印か文章でその方向を明記させた。15枚の図形刺激、1枚提示する毎に、1回評定させ、その手続きをくり返しながら15枚の図形刺激が提示順序で終了するまで、室内後方のスピーカーから適度な音量で音刺激が継続して流された。

表1 実験計画表

群	人数	情緒状態	音刺激	群	人数	情緒状態	音刺激
CO(40)群	18	快	♩=40のテンポ	CO(120)群	32	快	♩=120のテンポ
UC(40)群	18	不快	♩=40のテンポ	UC(120)群	20	不快	♩=120のテンポ

図形番号	1	2	3	4	5	6	7	
図形								
図形番号	8	9	10	11	12	13	14	15
図形								

図1 図形刺激(同一の図形で色彩は黒色と灰色の二系列がある。本実験では黒色系列のみを使用)

## 結果

動きの程度について、四群間、図形刺激間のF検定、二要因の分散分析の結果、四群間では、 $F = 2.37$ ,  $df = 3/184$ ,  $p < .10$  で有意な傾向が認められ、図形刺激間では、 $F = 6.78$ ,  $df = 14/1176$ ,  $p < .01$  で有意な差が認められた。

四群間及び図形刺激と四群間の比較結果は図2、図3-1、図3-2に示す通りである。

また、下位検定における図形刺激別特性を示した結果は表2である。

動きの速さに関する結果は、図4、図5-1、図5-2に示す通りである。

F検定による分散分析の結果、四群間では $F = 2.86$ ,  $df = 3/82$ ,  $p < .05$  で有意な差が認められた。

同じく図形刺激間でも、 $F = 5.01$ ,  $df = 14/1148$ ,  $p < .01$  で有意な差が認められた。

また下位検定における図形刺激間の速さの特徴の結果は、表3に示す通りである。

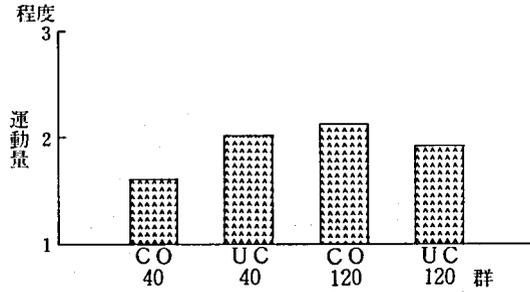


図2 動きの程度の四群間の平均の比較

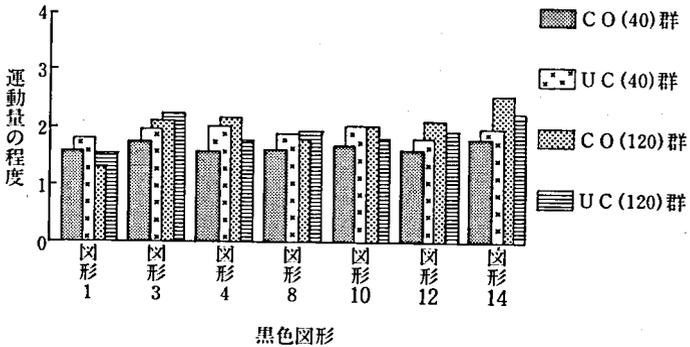


図3-1 動きの程度の図形刺激別四群間の比較

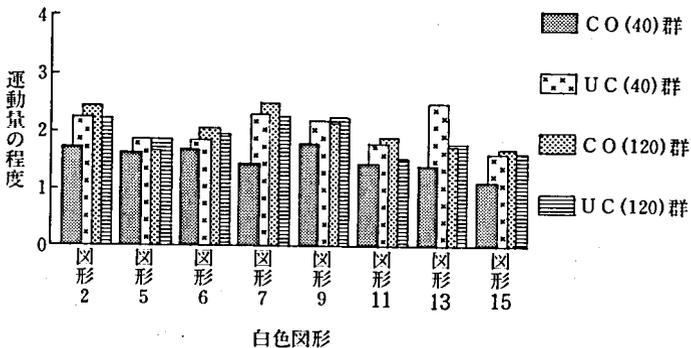


図3-2 動きの程度の図形刺激別四群間の比較

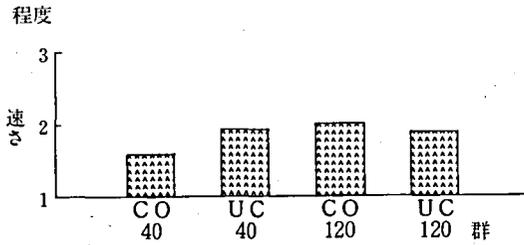


図4 動きの速さの四群間の平均の比較

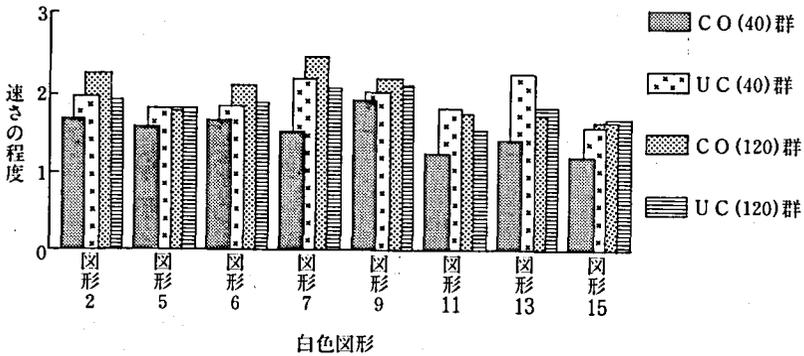


図5-1 動きの速さの図形刺激別四群間の比較

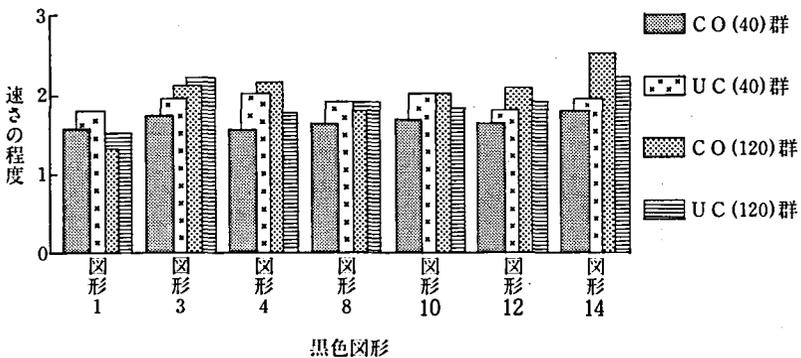


図5-2 動きの速さの図形刺激別四群間の比較

表2 運動量の図形刺激間の比較

図形	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
1		<	<	<		<	<		<	<		<		<	
2	>				>			>			>		>		>
3	>				>			>			>		>		>
4	>				>						>		>		>
5		<	<	<			<		<					<	
6	>														
7	>				>			>			>		>		>
8		<	<				<							<	
9	>				>						>				>
10	>													<	
11		<	<	<			<	<				<		<	
12	>									>					>
13		<	<	<			<							<	
14	>				>			>		>		>		>	
15		<	<	<			<	<			<		<	<	

(<は多い, >は少ないことを表わす)

表3 動きの速さの図形刺激間の比較

図形	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
1		<	<	<		<	<	<	<	<		<		<	
2	>										>				>
3	>										>				>
4	>										>				>
5							<		<					<	
6	>										>				>
7	>				>						>		>		>
8	>													<	
9	>				>						>				>
10	>										>				>
11		<	<	<		<	<		<	<				<	
12	>														>
13							<							<	
14	>				>			>		>		>		>	
15		<	<	<		<	<		<	<		<		<	

(<は早い, >は遅いことを表わす)

## 考 察

以上の結果にもとづき、仮定 1, 2 を含めて考察を試みる。

### I 動きの程度と情緒状態の分析

#### 1 動きの程度と四群間の特徴について

まず、CO(40)、CO(120)群にみられる快的状态群について考えてみると、CO(120)群の方が、動きの程度を多く投影している。個々の図形刺激との関係は後で検討するとしても、図形全般に動きをかんじる程度が大である。快的で速いテンポの下におかれた情緒状態は、遅い速さのテンポの下におかれた快的な情緒状態よりもより強い情緒興奮を喚起させ易く、それが動きの程度の高低に影響を与えているのではないかと推測される。今回は、イメージや方向性に関する分析は行っていないが、心が躍る、ワクワクするという内的興奮状態が経験されて、それが動きの程度の高さとして投影されてきているのではないかと考えられる。

次にUC(40)群、UC(120)群の不快両群について検討してみる。

UC(40)群とUC(120)群とでは、全体として異なった傾向が認められなかった。しかし、後述するように、個々の図形刺激との関連で両群を比較してみると、不快両群それぞれの特徴が把握できる手がかりが与えられているように思われた。

不快な情緒状態というのは、快的な情緒状態に比べて、情緒を喚起させられる外的な刺激要因（本実験ではテンポの遅速を意味する）の差異に応じて不快感が増大したり、減少したりするという情緒の変動が少ないのかもしれないということが示唆される。このことは、CO両群とUC両群の動きの程度の投影のちがいを検討することによって、より明確となるだろう。つまり、CO群が必ずしも動きの程度を高く（多く）投影するとは限らず、むしろUC群よりも低い（少ない）動きの投影をする場合があるということを考慮すると、快的な情緒状態は、情緒を喚起するテンポによって、「ゆったりした感じ」や「躍動的な感じ」

といった質的に異なる情緒の性質をひき出させ、動きの程度の高低に影響を与えているといえよう。不快な情緒状態では、情動を喚起する音刺激のテンポにかかわらず、不安感や不快感、場合によっては焦燥感のみを強化し、異質な情動をひき出させることなく、同じ性質の不快な情動のみが強化され、不快な情緒の解消を求める動きとなって投影されてゆくのではないかと推察された。以上の結果は、仮定1で考えた音刺激のテンポにより動きの投影が異なるという点について、UC(40)群以外は支持されたが、情動の性質の変化が生じているのか否かを含めて、今後更に実験を重ねて検討してみる必要があるだろう。

## 2 図形刺激と四群間の特徴について

これまで図形刺激特性と動きの投影との関係を調べてきて、図形の構成要素としての色彩(黒色・白色・灰色)と形態、及びそれらを含めた図形全体の構造的要因(安定性・不安定性)が影響を与えることが明白になってきている(門前, 1984, 1985)。

今回の実験においては、灰色系列についての分析は行なっていないが、形態と色彩及び構造的要因について検討してみる。

まず黒色・白色という色彩との関係を検討すると、図形1, 3, 4, 8, 10, 12, 14の7枚の図形が黒色であり、残り8枚が白色図形である。図2で示されるように、CO(40)群は、他の三群に比べて動きをかんじる程度の振幅が、図形間で少ないことが判る。黒色と白色に図形刺激特性を分けて捉えてみても、図形14と図形15との間で、唯一、差が認められる結果を示しているのみである。

UC(40), CO(120), UC(120)の三群は、いずれも、黒色と白色という図形刺激特性の対比によって、かなり図形間に振幅が認められているのが特徴といえよう。なかでも、CO(120)群は三群中最も振幅の大きい傾向を示していることが明らかとなった。これらのことを考え併わせると、UC(40), UC(120)の不快群は、音刺激のテンポにかかわらず、共に、黒色図形刺激に対して、動きの程度の投影が大となり、白色図形刺激に対しては、小となると判断される。このことは、不快な情緒が、黒色の色彩によって強化され、ないしは、不快感

が刺激され、動きとして外界に不快感を投影することによって、逆に不快感を解消しようとしていると解釈できないだろうか。動きの速さとの関連性で更に、検討してみるが、本実験においても、黒色のもつ意味（白色や灰色との対比において）が明確に位置づけられるように思われた。

同じ黒色図形でも、図形3、4、14のような円形や円形の集合体と、図形1の三角形では、動きの程度の投影に、差が認められる。この差を検討するために、図形刺激特性としての形態について概観してみると、円形ないしは円形に近い形態を有している図形10に、より多い動きの投影が認められ、図形13、図形8及び図形12の順に、動きの程度が多くなっている。形態的に円形は動きを投影しやすい特性を有していると想定されるが、CO(40)群では、他の三群より円形に対して動きの投影が少ないことを考え併わせると、黒色と円形という二重の組み合わせによって、不快群では動きが促進されていったと推察され、CO(120)群では、黒色の色彩に拘泥せず、円形の形態の方に注意が向けられて、速い音刺激のテンポによる快的情緒の投影が促がされていったと考えられよう。

図形2、図形9は白色円形図形であるが、UC群は共に、かなり多い動きの程度の投影を示している。この投影の仕方については、図形の継列的な捉え方をしてみる必要があるだろう。つまり、最初の図形である黒色三角形のあとに第二の図形の提示として図形2の白色円形が呈示されたということは、両UC群は最初の図形提示で、直ちに不快感を動きに投影しにくかったのか、それとも、三角形という比較的安定した構造を有する図形であるのに、不快感を刺激する黒色を有しているという矛盾した二面性をもつ第1図形に対して、不快感を十分処理できにくかったと仮定できるかもしれない。その解消されない不快感が、円形白色の図形の提示によって、不快感の解消を促す動きの投影が可能になったのではないだろうか。このことは、図形8につづく図形9への反応の仕方にも共通するものと考えられる。

注目すべきは、図形13におけるUC(40)群の反応である。三角形は、比較的

安定した形態であり、安定した構造的特徴を有する図形であると考えてきたが、そうすると、UC(40)群の図形13に対する投影の程度の大きさが理解しにくいことになる。本実験のみで、結論をだすに足る分析は不十分であるが、もしかすると、三角形は、形態的に、安定と不安定という二重の側面を備えうる図形の特徴を有しているのか、あるいは安定、不安定という尺度で把握されえぬ別の特殊な形態や構造的特徴を有する図形として認知されているのかもしれないという懸念を抱かせられ、今後の課題となることが示唆された。

### 3 図形の構造的特徴及び図形の刺激特性について

円形に近い安定した構造を有する図形では総じて動きの投影は低く、不安定な構造を有する図形（図形7）では、両UC群とCO(120)群の三群で有意に高い投影の程度を示している。

CO(40)群のように、ゆったりとした情緒を経験させられている場合には、ゆったり感が不安定な構造を有する図形刺激を提示されても動揺せず、動きの投影を促進させないが、CO(120)群では、速い音刺激による情緒の高揚が、外的刺激的要因としての図形の構造の安定性、不安定性に支配され、変化し易い状態になっていることを伺わせられる。したがって外的（図形）刺激に即して、その反応の程度に振幅が大きく、現象的には、UC(120)群と同じような反応の様式をとっているが、UC群のような不快感や抑うつ感からの解消という意味をもたず、図形の形態や構造に即応した動きの程度を享受しているとうけとれる。この点については動きの速さについての結果とも考察してみる必要がある。

図形刺激の特性と動きの程度との関係をまとめてみると、図形1, 5, 8, 13, 15は、動きの程度の投影が低い図形であり、図形2, 3, 4, 6, 7, 9, 10, 12, 14は、動きの程度の投影が高い図形といえる。そのなかでも図形3, 4, 14の黒色円形図形と図形2の白色円形図形は、他の図形よりもより高い投影を促す。

このことから円形という図形の形態が動きの投影を促進させる特性を有して

いることが本実験においても確認された。

また不安定な構造的特性を有すると考えられる図形7についても同様、動きの程度が促進され易い特性を有することが確認された。仮定2で考えた色彩(黒・白)のみで情緒状態のちがいが投影されるのではなく、図形の構造、形態、色彩を総括した図形の刺激特性について更に詳しい分析が必要となることが示唆された。

## II 動きの速さと情緒状態の分析

### 1 動きの速さと四群間の特徴について

動きの遅速に関する四群間の特徴は、CO(40)群とCO(120)群との間で有意な差が認められた。CO(40)群は、四群中、最も遅い速さの投影をし、CO(120)群は、逆に、最も早い速さの投影をすることが判明した。両UC群をみると5%水準では有意差は認められなかったが10%水準では、両UC群共、CO(40)よりも早い速さの投影をしていることが判明した。このことは、音刺激のテンポにかかわらず、不快な情緒の解消として、早い速度の動きでの投影がなされていることが示唆された。また不快群の場合には、動きの程度という量的側面と動きの速さという質的側面とが同一次元で把握されうることを暗示していると考えられた。つまり、動きを感じる程度が高い場合には動きの速さも早い投影がなされ、動きの程度が低い場合には動きの速さも遅いという関係把握が可能となることを意味している。快群の場合には、不快群とは異なり、動きの程度と速さとは必ずしも同一次元で捉えられるとは限らず、量的側面と質的側面という異なる次元での二元的な把握が必要であることが明らかとなった。

### 2 図形刺激特性と四群間の動きの速さとの関係

まず、図形刺激別にみられる快群の特徴について検討する。

CO(40)群においては、図形刺激間での遅速の差はほとんど認められなかった。やや早いとかんじられた図形は図形9で、やや遅いとかんじられた図形は図形15であるが、全体として、ゆっくりとした速さの投影が中心であった。

CO(120)群では、各図形間に遅速の差がかなり明瞭に出現している。なか

でも図形14は最も早いとかんじられ、図形1は最もゆっくりとかんじられた代表的図形である。速さの投影の傾向は、CO(40)群よりも全体に有意に早いと感じられているが、遅速の差の投影が図形刺激特性と相呼応して顕著に現われたと理解される。特に、不安定な構造特性を有する図形や、黒色円形図形で早い速度を示していることは、UC(40)群が、ゆっくりした音刺激によるテンポから生じる不快感を、早い速度での動きで、相補的に解消しようと試みているのに対し、CO(120)群では、早い音刺激によるテンポから生じる情動との一体感が、不安定な構造や黒色という不安な刺激要因をぬぐい去る、追い払うはたらきをしてしまうのではないかと推測される。したがって、たとえば図形11、図形13などでは、やや速さが遅くなっている場合をみると、図形の構造的安定性が、早い動きの投影にストップをかけ、早いテンポによる快的情動と安定した図形刺激特性との間で葛藤を引きおこさせる原因になっているのではないだろうかと思われ。その結果、継列的に次に提示される図形刺激が、不安定な形態や構造特性を有していると、不安定性を「ぬぐい去る」ような、あるいは、それらの刺激特性をむしろ「面白い」と享受して、ストップがかけられた速さの分までも一挙に放出する傾向にあるのではないかと考えられる。

また、UC(120)群が、UC(40)群と相違が認められなかった点については、UC(120)群は、それ自体が、早いテンポによる音刺激の状態におかれている為に、UC(40)群のようにそれ以上の早い動きを投影して不安や不快感を解消する必要がなかったといえる。

動きの速さと情緒状態との関係を行動の観点から捉えてみると、CO(120)群の反応にみられるように、躍動的に活発に刺激に反応できることが肯定的な効果をもたらす場合と、軽はずみで向こう見ずの行動として開発され、否定的な効果をもたらす場合が予想されよう。これは、両UC群が、不安や不快感の解消のために、衝動的な行動や向こうみずの行動をとったり、場合によっては焦燥感の解消のために活動的になると、現象的には同じような結果をきたすものといえよう。

形態や色彩の図形刺激特性と速さとの関係を調べてみると、CO(40)群と他の三群との間では、黒色図形刺激に対して有意な差が認められたが、CO(40)群を除く、三群間では、顕著な差は見い出されなかった。

黒色系列と灰色系列による実験(門前, 1984)では、黒色系列の方が灰色系列よりもより早い速度の投影がなされ易いことが確かめられてきたが、白・黒という対比関係においては、両CO群より、両UC群の方が黒色の色彩によって、早い速度を投影すると断定できず、灰色系列との比較を試みる必要が残された。

### 3 図形刺激特性及び図形の構造について

表3を基にして、各図形刺激特性や構造的特性について検討してみる。

図形1, 11, 15は、他の円形図形に比べて遅い速度の動きの投影を促す。図形14は逆に早い速度の動きを投影する特性を有する図形刺激であることが明らかとなった。図形11と15は比較的安定した構造的特性を有する図形であり、図形14と図形1は、共に安定した構造的特性を有する図形と想定されているが、共に黒色を有しているのが特徴である。図形1では、速さが抑制され、図形14では速さが促進されるという相違を明確にしてゆきたい。三角形という形態的特性について図形13と比較検討してみると、図形1は、黒色の色彩を有するという点で、僅かに速さが抑制されているものの、両者に色彩の刺激特性という側面での差異は根本的には認められ難かった。円形という形態的刺激特性についても同様、黒色円形図形は白色円形図形よりも僅かに早い速度の動きが投影されたにすぎない。この点でも、黒色の色彩が不安を惹起する決定因とは断定し難い。

したがって、三角形と円形という図形刺激特性は、形態、色彩、あるいは両者の構成する構造的特性を有する図形刺激を個体が認知するときに、他の図形とは異なる何か別のイメージを想起させ、独自の構造的特性を有する図形として把握されているのではないかという考えに到達せざるを得ない。その独自の構造的特性とはどのような性質のものなのか、安定性・不安定性とは異質なのかを更に今後検討してゆきたい。

### Ⅲ 動きの程度・速さと情緒状態の分析

動きの程度と動きの速さについての関係は、異なる情緒状態においては、これまで動きの質的側面と動きの量的側面の二側面に分けて二元的に捉えるのが妥当であると考えてきた（門前，1982）。

しかし本実験の結果から、動きの程度と速さとの関係は、快・不快の情緒の状態が緩やかなテンポの音刺激によって惹起されるときには、質・量の二元的側面として捉えられるが、快・不快の情緒の状態が早いテンポの音刺激によって惹起される場合には、二元的な関係として作用せず、一元的に、量・質が共に一体となって個体に働きかけてゆくことが判明した。すなわち、 $\downarrow = 120$ の音刺激による快・不快の情緒状態では、動きの程度の投影が大（高い）であるということと、動きの速さの投影が早いとかんじる度合いとが相応して、一元的に作用しているということである。したがって、UC(40)群でみられた動きの程度と動きの速さの相補的關係は、UC(120)群では認められず、動きの程度の高低と同次元での速さの投影によって、不快感を直截的に解消することが可能になっていると考えられる。

両CO群では、 $\downarrow = 40$ 、 $\downarrow = 120$ というそれぞれの音刺激のテンポに即した速さの投影がなされているが、CO(40)群では、不安定な図形刺激特性においても、不安定さが気にならないのに対して、CO(120)群の情緒状態では、不安定な図形刺激特性や構造的特性に対して、動きの程度や速さが抑制される代りに、安定した図形の形態や構造的特性を有する図形において動きの程度や速さが促進される傾向が確かめられた。

### Ⅳ 仮定の検討とまとめ

上述したことから、仮定1、2を中心にまとめてみる。

仮定1については、UC(40)群を除いて仮定通り支持された。このことから、 $\downarrow = 40$ と $\downarrow = 120$ の音刺激が惹起させる情緒状態は、CO(40)群とCO(120)群とでは、同じ快状態でも質的に異なる情緒を触発し、形成していくのではないかという点、UC(40)群とUC(120)群とでは不快状態の情緒的性質は同じ

であるがその強さ—量的な強さがUC(120)群では増大してゆくのではないかという点が示唆され、今後の課題となった。

仮定2について、図形刺激の色彩による特性は、確かに動きの投影を抑制したり、促進させたりする要因であることは確認されたが、本実験では形態と色彩を区別して捉えることは十分にできにくかった。黒色系列、灰色系列、白色系列という系列別に実験を行なった場合は別として、本実験のように区別して検討していない場合には、図形の形態、色彩を統合した図形の構造的特性について検討する必要性が示唆されたし、図形の提示順序との関係についても今後再検討する必要性が指摘された。

筆者は、動きの程度と動きの速さ・方向性について動きの量的側面と質的側面として二元的に捉えるのが妥当であると考えてきたが、情緒状態の性質によって、量的側面と質的側面とが一元的に作用する場合が生じることを本実験より示唆され、今後は、情緒状態の性質との関連性も無視できない重要な要因として検討課題に含めて分析する必要性が生じた。

更に、図形刺激特性として、安定性・不安定性をその構造的尺度として設定してきたが、この点に関しても、正三角形や円形は独自の構造的特性をイメージさせられるのか、あるいは両方(安定性・不安定性)の構造的特性を有する図形として位置づけられ易いのかについて詳しい分析を続けてゆきたい。

## 引用文献

- 門前 豊志子 1975 ロールシャッハ・インクブロットの意味構造の研究 幼児の反応過程(1) 日本心理学会第39回大会発表論文集, 452.
- 門前 豊志子 1976 ロールシャッハ・インクブロットの意味構造の研究 幼児の反応過程(2) 日本心理学会第40回大会発表論文集, 893—894.
- 門前 豊志子 1982 情緒的快・不快が投影的運動知覚に及ぼす影響 心理学研究 第53巻, 第5号, 266—273.
- 門前 豊志子 1984 彩色・無彩色図形における刺激特性について——因子分

析による試み—— 信州豊南女子短期大学紀要 第2号, 105—120.